上島の文芸

水曜会【弓削】

ゆるく大きく鳶の輪や日向ぼこ　亀島　一美

ウォーキング落ちる冬日に急かされて　小林しぐれ

帰り来し波止の混み合ひ冬鷗　田坂　紫苑

浜風の吹き頻(しき)く落ち葉掃きにけり　田坂芙代子

会食の河豚刺食べぬ言ひ訳を　中本砂恵子

牡蠣飯のおこげの色のあたたかき　森本　恵子

生名短歌会【生名】

平穏な暮らしは親の賜物と思えど謝する術(すべ)なくなりぬ　村上　宗子

シベリアの原野に今日は風もなく落葉に遊ぶリスの親子が　村上　司

現実に築地市場に出向きゆき驚きながら金目鯛買う　渡辺スズ子

六十五年経し今知りし「因島空襲」百二十三名亡くなりし真相　池本　滝子

暑い夏病室に待つ夫の許(もと)にと通いしに今は早や枯葉舞いくる　浜田伊勢子

雀にと買いたる餌を撒きし後カーテン閉めて待つ間も楽し　増成　君子

池の端(は)の歌碑の形の整うをおっとり囲む旅の終りに　池田　友幸

むつみ歌会【岩城】

歳末の今治の街歩みゆくシャッター降ろす店舗の多し　宮本佳世子

庭隅の柊(ひいらぎ)は枝葉しげらせて赤き実をつけ冬に真向かふ　浪本　綾子

震災に家と息災奪はれし弟は喜寿を目前に果つ　池田　繁雄

写真立にデコレーションをあしらひて吾(あ)を喜ばす従妹の娘らは　森本　和佳

健康のためにつづける畑仕事作る楽しみ食べる喜び　白石　勇

はじめての太鼓の演奏詩に書きて「うしお」に載りしと孫見せくるる　西本　優子

魚島俳歌柳会【魚島】

磯牡蠣(いそがき)を打って老妻帰り来る
妹の墓に額(ぬか)ずく巳午(みんま)かな　三上　運

亥の子うたかすかに聞(きこ)ゆ長寿島
南西風(まじにし)が吹き荒れデビラ佳く乾き　大黒　丸

山谷のありし人生年守る
水仙の数輪咲いてお元日(がんじつ)　大船　近義

大荒れの日本列島瓦(かわら)まふ
演歌好き若き時代がよみがえり　八幡　丸

時折は妻も家事するつもりかな
ちょっとだけ見せて湧(わ)かせる隠し芸　島野玉三郎

君に出会ひてこの島に根をおろし
支所長の笑顔に魅(ひ)かれボランティア　城山　太郎

痛いよにホッと寒(さむ)夜の介護かな
風邪予防嗽(うがい)手洗い児に言われ　柳　小福

魔のカーブまっ赤な紅葉見とれるな
やりたいよ親の教育もう一度　松原　瑞峰

試合結果

■2010いきなメランジュ杯ビーチボールバレー大会（12月5日　蛙石体育館）

優　勝　おっとっと（生名）

準優勝　ｆｆＡ（弓削）

第三位　あっぷっぷ（生名）

■第27回愛媛県高校1年生バドミントン大会（12月11日愛媛県総合運動公園体育館）

女子Bクラス　ダブルス

ベスト8　小田萌子・田窪千暖ペア（弓削高校）

■第38回愛媛県団体総合バドミントン選手権大会（12月12日愛媛県総合運動公園体育館）

女子3部

ベスト6　弓削高校

（金本紗貴・福田真梨・小田萌子・田窪千暖）

平成22年度　人権作文コンテスト愛媛県大会　優秀賞受賞作品

ばあちゃんへ

弓削中学校　2年　益﨑　成香

ばあちゃん、ごめんね。

私は祖母に、何かしてあげられただろうか。祖母の心の中に、記憶の中に何かを残してあげられただろうか。祖母はいつも笑顔だった。きっと毎日を必死で生きていたんだろうな。でもそれを、私は分かってあげることができなかった。受け入れることができなかった。

ある日を境に、祖母はどんどん変わっていった。同じことを何度も聞くようになって、繰り返すようになって。私の知っている祖母が、いなくなってしまうようで、すごく怖かった。いつからか、祖母と話すことさえも怖くなって、無意識に祖母を避けるようになり、友達に、祖母のことを知られることも、恥ずかしかった。祖母は、アルツハイマー型認知症だったのだ。

「ばあちゃんのことを、学校で悪く言よんやろ。」

祖母が、私に聞いてきたことがあった。それは一度や二度ではなく、祖母の情緒が不安定であるときは、度々あることだった。

「ばあちゃん、信じてや。私はそんなこと言わんよ。」

私は、悲しい気持ちを押し込んで、よくこう答えた。祖母が、忘れてしまう、ということは、仕方のないことだと分かっていた。でも、どうしてもそれを、祖母の行動の一つ一つを、仕方がないと受け流すことが、私にはできなくて、私は酷い考えを持つようになってしまった。

それからまもなく、私の考えどおりのことが起きてしまった。祖母が施設へ行くこととなったのだ。私の心には、淋しさとともに、これでやっと安心して生活することができるという安心感が生まれていた。でも父は違った。自分の母親である祖母を、最後まで自分たちで看てあげることができないことを、とても悔やんでいるように見えた。

「面会に行ったら、ばあちゃんが帰りたくなってしまうけん。」

と言って、あまり面会に行かない父を見ているのは辛かった。何も知らずに、父の迎えを待っている祖母のことを考えると、もっと辛かった。もっと、私にもできることがあったのではないだろうか。

今、祖母の記憶の中に、私はいるだろうか。いるのだとしたら、その私はどんな私なのだろう。認知症になっているお年寄りの方は現在二百万人で、八十五歳以上の三人に一人が認知症だと言われているそうだ。そんな高齢化社会の中で、今後お年寄りの方とともに生きてゆくことができるのは、私たちなのだ。そうしていくためには、まず私たちが、お年寄りの方や認知症の方について、しっかりと向き合い、理解していくことが、最優先されるだろう。認知症の方と笑顔で関わることは、実際にはとても難しいことだと思う。でもそれが、何より大切なことでもあると、私は思う。認知症の方の多くは、分からなくなることに常に不安を感じながら生活している。そのため、分からないことを責めず、安心して生活のできる場を作ってあげることで、不安を取り除いていってあげることができるのではないだろうか。私は祖母に、そうしてあげることができなかった。きっと祖母はいつも不安でいっぱいだっただろう。何度も何度も同じことを聞くのは、認知症の方の、不安を伝えるためのサインなのだ。

私の願いは、これから少しでも多くの人に、きちんと認知症について理解してもらうことだ。私は、きちんと祖母を受け入れること、認知症を理解することが、できていなかった。認知症の方の記憶は、確かに薄れていくかもしれない。でも、私たちと同じ、心はあるのだ。一緒に楽しみたい、笑い合いたい、知りたい、という想いは消えてはいないのだ。少し遅かったけれど、私は祖母のおかげで、そのことに気付くことができた。今、私たちにできることは限られているけれど、その中で認知症の方に限らず、多くのお年寄りの方の想いに寄り添っていきたい。そして、そんな助け合いの社会をつくっていきたい。

ばあちゃん、ありがとう。今はもう、ばあちゃんの記憶の中に、私はいないのかな。そう思ったら悲しいけれど、仕方のないことなんだよね。離れた今になって、やっと理解できるようになった。ばあちゃんがいなかったら、認知症について、知ることもなかったし、これからそんな人たちに出会っても、何もすることができなかったと思うよ。ばあちゃんが私を忘れても、私の心の中には、ちゃんとばあちゃんはいるからね。会うのは少し、怖いけれど、ばあちゃんが、いつも私を応援してくれていたように、これからは私が、ばあちゃんを応援しているよ。